

ワンだフルライフ 前期！

猫ト みかん。

目玉焼き

おはようございます。

宝野一子（たからの いちこ）、ぴちぴちの大学一年生であります。

ぴちぴちっていうと、あれですね。

魚を連想しちゃいますよね。ぴちぴち、うおうお、って感じでしょうか。

新鮮な、という意味の擬音語なのかもしれませんが、魚にしてみれば、死に物狂いですよね。ぐはぐはです。息苦しいぜ、こんちくしょう、と地面を叩いているわけですよ。

えーと、何の話でしたか。

そう、わたしがぴちぴちの大学一年生、という話でした。ぴちぴちは止めときましょう。ぴかぴかの一年生、という、ランドセルを背負った姿が連想されますが、きっとコマーシャルの影響ですよ。

まあ、そんなことはどうでもよくて。

わたくし、今、とっても真剣なんです。

手にはフライ返し。

目の前にはフライパン。

そして、フライパンの中ではじゅーじゅーぱちぱちと目玉焼きが音を立てています。

目玉焼きは、非常に難易度の高い料理だと、わたしは思うわけです。

少なくとも、スクランブルエッグよりは高度なテクニックを必要とします。黄身をつぶさずにフライパンに卵を割るという点において。もちろん、殻の欠片を入れないように割る、という点においては双方に共通の関門なわけですが。

四月からひとり暮らしを始めて、もうひと月ですからね。卵を割るテクニックはすっかりマスターしたわたくしです。

え、小学生でも出来る？ ふふん、何事も、他人と比べちゃあ、いけませんよ。わたしはわたしって奴です。

「はっ、今だ！」

カチッと素早くわたしはコンロの火を止めました。

一仕事を終えた達成感に、額の汗をぬぐいます。汗はかいてませんでした。

用意しておいたお皿に、目玉焼きを移しました。醤油をちょろっとかけます。醤油派です。

別のお皿に、トースタから出したトーストを乗せて、インスタントコーヒーの粉を入れたマグカップにやかんからお湯を注ぎます。冷蔵庫からヨーグルトを一つ出して、それら全部をコタツの上に並べます。

朝食の準備はこれで整いました。

はい、手を合わせて、

「いただきます」

さてさて、さっそく箸を手に、目玉焼きへ。

そうっと箸で、盛り上がった黄味の部分をつぶっと刺します。

とろろっと黄身があふれます。でも、縁だけはちゃんと完熟。

「ばっちり」

語尾に音符マークをつけて、誰にともなうにっこり。

しっかり完熟になりすぎず、半熟の部分を残すのが、わたしのおいしい目玉焼き。

このタイミングをマスターするまでに、もうどれほどの卵が殻になったことか…。

両面ぽくぽくにするのも好きだけど。

「ふふふー」

これだけで、ご機嫌になっちゃうわたくしです。

今度は、卵焼きにも挑戦してみようかな。

朝の占い

ニュースなんかは、出かける準備をしながら流し見るだけ。

しかし、

『それでは、今日の占いです』

という声にぴたりと手を休めて、テレビに視線を向けるのは、あれですよ。女の子の習性みたいなもんですな。雑誌の後ろにある占いとかも、つい見ちゃったり、ね。次の日にはすっかりさっぱり忘れちゃうんですけどね。

『1位の星座は…』

たくさんある星座の中から、どうしてこの十二の星座が選ばれたのかしら、って時々思う。

時々思うだけで、ネットで検索するに至らないのは、まあ、そこまで興味がないからなのだけれど。星座物語とかは面白そうって思うけど。

大体、星座って、夜空を見上げても、ちっとも分からないんだもの。線で結べないし、仮に結べたとしても、どんなに想像力を逞しくしたって、羊や牛の形に見えないし。考えた人はすごいなって思うけど、それがこんなに世界的に広がったっていうのもすごいよね。

星を見て占うっていうのは、世界を問わず、どこでも昔から行われていたことだ、考えてみれば。想像力をもっているのが人間だって言ったのは誰だったっけ。星はただ瞬いているだけなのに、そこに吉凶や物語を描いてしまうなんて、人間ってえらいもんだと思うよ、ほんと。

『牡牛座です』

あ、1位は牡牛座だって。

わたし、あと一日生まれた日が違ったら牡牛座だったんだよね。惜しいなあ、まったく。

星座を自分で選べるとしたら、わたしはオリオン座がいいな。北斗七星以外で、唯一形が分かる星座。

冬の夜、オリオン座を空に見つけると、何だか嬉しくなるよね。そんな歌があったね。

『続けて、2位から6位の星座…』

テレビの画面に自分の星座を探す。

ナッシング。

ここまででないと、ちえって思う。占いの内容なんか、見たすぐ後には忘れちゃうくせにね。

『7位から11位の星座…』

おおっと。

ないぞ。ないよね。もう一度確認。ないよ、うん。

ここでないと、見なけりゃ良かった、と後悔する。もう、見なくても結果は分かるけど。

『12位の星座は、牡羊座です』

がーん。

『ラッキーアイテムは、カレーうどんです』

それってアイテムか？ まあでもせっかくならば、今日のお昼は学食でカレーうどんを食べようか。

「おっと、いけないいけない」

テレビを消して、鞆を肩にかける。

一限目の授業がある日は、占いを最後まで見ていると、始業までぎりぎりなのである。

買い物をして帰るまでに持ち歩くのが恥ずかしいもののランキング。

第三位 ポテトチップス

かさばって、軽いから、袋の上の方に詰めることが多いんですよね。そうすると、丸見えで、何となく恥ずかしい。カップラーメンとかも、同じ感じで恥ずかしい気がする。親の教育が良かったのですね。こんなもの食べるなんて不良だわ、というイメージが刷り込まれているみたいなのです。ちょっと不良になりたい時に、食べるものです。

第二位 トイレットペーパー

隠しようがないですね。必需品だし、恥ずかしがるほうがおかしいって分かってるんだけど、買った帰りには知り合いに会いたくないな、という一品です。

第一位 葱

長ネギの方です。タマネギはいいんだ、タマネギは。

だって、袋から突き出るじゃないですか、どうしても。漫画とかでも、買い物袋の象徴みたいに、葱が突き出ているじゃないですか、葱が。

誤解の無いように付け加えておけば、わたし、葱は好きですよ。薬味には欠かせませんよね、葱。

「いいじゃないの、葱くらい出てたって。何がそんなに嫌なのか分からないわ」

苦笑混じりに友だちに言われたけれど、うーん、あまり分かってもらえないことなのかしら。

「だって、何か嫌じゃない？ 葱の突き出たスーパーの袋を提げてる自分の絵面が」

「そう？ 若奥様っぽくて良いじゃない」

「いくない。テンション下がる」

「ふうん。面白いねえ、いっちゃんって」

笑われてしまった。

冷蔵庫にも冷凍庫にも、もう葱はないんだ。買って帰らないと。

ちなみに、カートの上下にかごを載せてスーパーで買い物するのはわたしの憧れです。

え、これも分からないって？

眠くならない授業の受け方

大学生ですから。勉強がお仕事です。

しかし、まだわたくし、一年生ですから、高校の延長みたいな必修授業ばかりなんですよ。入学したてはがっかりしたものです。大学では自分の好きな勉強だけをできるもんだと思ってましたからね。

威張ることではないですが、真面目な学生さんですよ、えっへん。遊ぶために学校に来ているわけじゃありませんから。

そんな、向学心溢るるわたくしですが、眠くなるのはしょうがない。

大教室で大人数の、しかも興味のない授業。その上、催眠効果のある教授の低音ボイスとくれば、もう、眠気に襲われるなどと言われても、無理な話ではないですか。

眠っちゃいかん、と思って、一生懸命瞬きをしないように、目を見開いたりするのです。けれども、だんだん、まぶたが重くなってきて、ぐらぐらと舟を漕ぎ出しちゃって。

いやいや、駄目駄目、とシャープペンシルを握りなおして、ノートを取ることに集中しようとするのです。けれども、一瞬気を失ったかと思ったら、ノートに宇宙語が書かれていたりして。

こらこら、しっかり、と授業の内容に一心に耳を傾けます。

「えー、ですから、あー、この法律が制定されたわけです」

けれども、やっぱりうつらうつらと頭が揺れて。

いっそのこと、五分ばかり寝てしまえば目も覚めるのでは、と思うのですが、授業中に堂々と寝てしまえるほど、度胸もないわけです。

マンガとかでよく、瞼に目を描いて、寝てても起きてるみたいに見える、ということをしてしていますが、女の子としてそれはちょっと出来ませんよねえ。あ、女の子じゃなくても出来ないですか。

授業とは別のことを考える、というのも一つの手ですが、それも何か悔しい。フェアじゃない気がしません？ わたしは、正々堂々と睡魔と勝負して、勝利を手にしたいのです。

まず、眠くならない授業と眠くなる授業を比較分析してみました。

眠くならない授業は、面白い授業、興味のある授業、体を動かす授業、指名される可能性がある授業などです。

眠くなる授業は、面白くない授業、興味の無い授業、講義を聴いているだけの授業、教科書を読んでいるだけの授業などです。

眠くなる授業を、眠くならない授業にするには、眠くならない授業における要素を、どれか一つでも眠くなる授業に取り入れたら良いわけですよ。おお、解決しそうな気がしてきたぞ。

ええっと、だから、面白くないものとか興味のないものを、有りに変えるのは、そう簡単にはいきません。もちろん、そうできれば一番なのだけれど。そういうことってきっかけが必要だって思うから。視点を変えることは常に必要だけれど、自分の好みを自分で無理強いすることもないって思う。

体を動かす、というのは、たとえば体育の授業とかで、そりゃあ、眠くなりようもないよねって話。座っている授業の時に、体を動かして出来る事といえば、手の甲をつねる、とか？ ペン回しをするとか？ 一人指相撲をするとか？

悪くない案かもしれないけど、ちょっと落ち着きのない感じ。ベストアンサーではないよね。

で、残るは指名される可能性のある授業、ということで。

ふふふ、これはね、ちょっとわたくし、考えました。指名される可能性のない授業は、いつまでも指名される可能性はないわけで、そこは変えられない。ならば。

授業の質問を考える、というのはどうでしょう。ふふふ、我ながら優等生なアイデアだと思う。つまり、逆指名ってわけですよ。どうよ、この素晴らしい授業への参加ぶりったら。

「いっちゃん、いっちゃん」

とんとん、と腕をつつかれて、がばっと身を起こしました。

「う……？」

「授業、終わったよ」

くすくす、と笑う隣の友。

「寝てた？」

「鏡を見ておいで」

ほっぺたを指で示して我が友が言いました。

みっちゃんは、本名を片山美千佳と言う。

大学へ入ってからのわたしの最も仲の良い友人である。

みっちゃんはちょっと変わっていると思う。

「いっちゃんのほうが変わっていると思うけれど」

「いやいや、みっちゃんには敵わないよ」

出会ったときから変な子だと思っていました。

みっちゃんとは、初めての授業で、席が前後になった仲です。地元から離れて大学へ来たわたしは、まだ友達がいませんでした。誰かと友達になれるかな、とときどきしながら席に着きます。周りの皆も、どこかそわそわと話しかけるきっかけを窺っている感じがしました。

そんな中、みっちゃんはしごく落ち着きを払っていました。

大人っぽい人だなあ、と憧れを込めて、わたしは彼女の長い黒髪を見つめます。座る姿勢もしゃんとして、ロングスカートが何ともエレガント。

きっと清楚な文学少女なんだわ、とわたしは想像しました。きっと昼休みには中庭の木陰で文庫を読むの。その肩にはいつの間にか小鳥がとまっていたりして。

講義を受けながら、頭の半分では中庭の出逢いから始まる、薄幸の美少女と時計をぶら下げたウサギの一大冒険ストーリーを思い描いていました。

と。件の文学少女が消しゴムを落とし、それはコロコロとわたしの足元に転がってきます。

「あ」

わたしはすぐに屈んで、消しゴムを拾いました。

そこで、見てしまったのです。見てはいけないものを。

思わず、ごちんと机に頭を打ってしまいました。

「大丈夫ですか？」

「あはは、うん。どうぞ」

わたしは気まずく笑いながら、消しゴムを彼女の手に移しました。

「……もしかして、見た？」

深刻な表情で彼女が尋ねます。

嘘もつけず、わたしは曖昧に頷きました。

あー、しまった、と彼女は苦笑。

「二人だけの秘密よ」

そっと人差し指を唇に当てた彼女に、わたしは一瞬で恋に落ちた。

と、というのは冗談ですよ。

わたしが気がついてしまった彼女の秘密とは、彼女がつっかけサンダルを履いて来ていたということ。しかも、健康に良いイボイボ付き。

「朝、弱いだよ」

というのが彼女の言い訳である。

他にも彼女のお寝ぼけエピソードは多々あるのだけれど、それはまた追々、ということで。

しずかちゃん

もう一人、よく授業で一緒にいる友人がいます。

名前は森川静。

生まれも育ちも男の子である。

しずか、なんて名前をしているくせに、口の減らない男子なのである。

大体、長く伸ばした前髪がわたしのお気に召さないのです。

「ああ、朝からうっとうしい前髪に会ってしまった」

わたしとしずかちゃんはスクールバス仲間なので、これがまた、よく出くわしてしまうのです。取っている授業も同じものが多いのだから、当然といえば当然なのだけれど。

「会った早々、嫌な顔をするな。感じ悪いな」

さっ、としずかちゃんは片手で前髪を払います。

「この仕種が俺は好きなんだ」

「それが格好つけているみたいで、嫌だっていうの」

「格好つけてるんだから、いいだろう」

「格好つけるな、格好悪いから」

「何をう。ワン子のくせに生意気だぞ」

「己はガキ大将じゃなくて、しずかちゃんでしょう」

口を開けば、そんな会話の応酬ばかり。

スクールバスが到着して、並んでいた列がぞろぞろと動き始めます。一限目の始業に合わせたこの時間帯が一番混み合うのです。

「こっち空いてるぞ」

運よく空いていた一席をしずかちゃんが教えてくれました。彼は格好つけのジェントルマンだから、こういう時は必ず譲ってくれるのです。

「かたじけない」

そういう時は、わたしも素直に礼を言います。

「どこのお侍だよ」

しずかちゃんはまた前髪をかき上げて笑いました。

バスが動き出します。大学まではバスに乗れば十分もかかりません。

「ほら、例の本、持って来たぞ」

鞆から出した一冊の文庫本を手渡して、しずかちゃんと言いました。

「にゃんとっ、ありがとう」

きらりと目が輝くのを自覚。

「己は猫でなくて、ワン子だろう」

こんな奴だけど、趣味の合う友人なのである。

履歴書

氏名 宝野 一子（たからの いちこ） 女

生年月日 19××年4月19日 19歳

電話番号 〇×〇-〇×〇×-〇×〇×

住所 東京都ほにゃらら

職歴 なし

免許・資格 なし

特技 方向感覚が良いので、道に迷いません。近道を見つけることも得意です。

趣味 料理。最近、とても上手に目玉焼きが作れるようになりました。今度は卵焼きに挑戦しようと意欲を燃やしています。

得意な科目 古典文学。百人一首は全部覚えています。

志望動機 子供の頃から、レジのお姉さんは憧れの職業でした。元気な挨拶は得意です。頑張りますので、よろしくお願いします。

配偶者 なし

扶養家族 なし

通勤時間 自転車 5分

よし。アルバイトの面接に、行ってきます。

面接

面接っていうのは緊張する。

だってほら、自分の良いところをアピールしなくちゃいけないでしょう？ 苦手なんですよねえ。日本人ですから。ご謙遜を。え、もうね、本気で苦手なの。

「緊張してる？」

ほらね、すぐに見抜かれた。

「はい」

と、はにかみながら笑うわたくし。ははは、と笑われては、えへへ、と間抜けに笑い返すしかないのです。

面接の人は店長さんでした。おでこの広い、眼鏡をかけたおじさん。少し猫背気味で、店員さんとは色違いの緑のエプロンを着けています。ちなみに店員さんのエプロンは濃い青色。

名札には青柳、と印刷されていました。青いうサギのシールが貼ってあるのが、似合わなくて可愛いな。

「それで、宝野さんは一人暮らしなんだね。夏休みとかお正月は実家に帰ったりするのかな？」

「あ、はい、一応」

首をすくめるように頷いてから、慌てて姿勢を正します。いけないわ、一子。面接中よ、しゃきっとして！

「うん、そっか。土日どちらかでも入ってもらえるのかな」

「はい、大丈夫です」

元気良く頷きました。

にこっと笑顔が出るところまでは、緊張もほぐれてきたみたい。

良かった、良かった。

「よし。じゃあ早速来週からお願いできるかな。大嶋さーん、ちょっと」

店長さんは、事務室から店内のほうへ顔を出しました。背中をぐぐっと反って、椅子の背がぎぎっときしんだので、倒れやしないかとわたしは気を揉みます。

「店長、大声で呼ばないでください。お客さんもいらっしゃってるんですから」

現れたのは背の高い女の人でした。髪はショートボブで、目の下にほくろがあります。ああっ、これが噂の泣きぼくろ！ と内心テンションが上がったわたくしでしたが、ぐっと堪えて慎ましさを保ちました。

「ああ、ごめんごめん。この子、宝野、えーと、一子さん。来週から入ってくれることになったから、よろしく」

「よろしくお願いします」

わたしは立ち上がってぺこりと頭を下げました。勢い良く立ち上がりすぎて、椅子を机にぶつけてしまいます。
ああっ、何て恥ずかしいんでしょう。

「宝野さん。こちらはレジ担当のチーフで大嶋さん。シフトの管理も彼女の担当だから、細かいことは後は彼女と相談してください」

「大嶋です。よろしくお願いします」

輝くようなスマイルで大嶋さんは言いました。必殺営業スマイルですね。

「はいっ、よろしくお願いします！」

わたしもはりきってスマイルでもう一度頭を下げました。

学食

財政の厳しい学生生活ですから、本当ならばお弁当を作るのがよろしいんですよね。みっちゃんは実家通いですが、自分でお弁当を作ってきています。

「偉いなあ、みっちゃんは」

「わたしは一人暮らししてるいっちゃんのほうが偉いと思うけどな」

ええー、ちっとも偉くないですー。夜更かしし放題だし、お菓子も食べ放題、休みは昼までだらだらし放題で、生活は墮落していく一方なのですー。

まあそれはともかく、お昼時の学食はまさに戦場。

ほかのもっと大きな大学では学食が、学内にいくつもあったりするみたいだけど、うちは一箇所なので一点集中。二階にあるパン屋さんで済ませちゃうこともあるけど、それじゃあ午後の授業を乗り切るエネルギーがチャージできませんから、大体学食でもりもり食べるのです。

お昼休みは二限目と三限目の間です。二限、三限と授業が続いていなければ早めに食べたり、遅めに食べたりと調節の仕様もあるというものですが、なかなかそう上手くいきません。

「席、空いてるかなあ」

授業終了のチャイムと同時に、急ぎ足で学食にやってきたわたしとみっちゃんですが、すでに学食の中は学生でごった返しています。

「うーん、無理じゃないかな。外で待ってるわ」

お弁当派のみっちゃんはあっさり言って、外の広場を示しました。広場は階段状になっていて、一番底に噴水があります。席にあぶれた学生や、野外派の学生は、その噴水を見下ろす階段に腰かけて昼食をとったりします。日陰が限られているので、そこも早くしないと埋まってしまいます。

「了解。では、わたしは食料を調達して参ります」

びしっと敬礼をとると、

「検討を祈る」

みっちゃんも乗っかってくれました。

みっちゃんと分かれたわたしは、学食という名の戦場に乗り込みます。入り口でトレーを取って、お腹を空かせた者どもの行列に加わりました。

何食べようかなー。オムライスのところは人気があって無理だなー。カレーかな。うどんの辺りが空いてるけど。カレーかな。親子丼も食べたいけど、時間かかるしな。カレーかな。カレーですね。

いざ、出陣！

緒場家さん

ひそひそ。

ちょっと、ちょっと、耳を寄せてくださいな。

あのですね、うふふ、いいですか、これは秘密なんですけど、わたしの部屋の隣りにはおばけさんが住んでいるんです。

びっくりしました？　びっくりしました？

え、あ、別に、そんなに？　ちえっ。

緒場家さんは謎の人です。お引越しをした際に、洗剤を提げて挨拶に行ったきり、会話を交わしてはいないのですが、時々廊下ですれ違って、こんにちは、とか、こんばんは、とか会釈をするだけです。

緒場家さんは男性です。たぶん。スキンヘッドでサングラスをかけています。背は巨大です。やや細身で、いつも作業衣を着ていらっしゃいます。うちの大学の学生らしいのですが、一体何回生なのでしょう。伝説の八回生ではないかとわたしは予想しているのですが。

緒場家さんの趣味は料理です。夕食時になると、いつも良い匂いが漂ってきます。隣の可愛いお嬢さんに、おすそ分けとか、してくれてもいいと思うんですけどね。そういうことは一度もないです。以前、カレーの匂いが流れてきたときには、わたし、ついお皿を持って、緒場家さんちのチャイムを鳴らしそうになりました。

もちろん、我慢しましたけれど。そこまで食い意地は張っていませんよ。淑女と書いてレディですから。

まめに洗濯もしていらっしゃいます。掃除機の音もよく聞こえてくるので、きっと綺麗好きなんでしょう。お洗濯を干す時の鼻歌は決まって中島みゆきです。時々こぶしを回して歌ってらっしゃるので、わたしは一緒に歌いだしそうになるのを堪えるのに必死です。ああ、いつか緒場家さんとカラオケに行く日が来るといいのに。

土曜日の夜には、時々お友だちがやって来ます。けれども不思議なことに、いつやって来たのか分からないのです。気がついたら、ぼそぼそと隣りから話し声が聞こえてきていて、楽しそうに談笑なさっているのです。

もしかしたら、本当のお化けさんが遊びに来ているのじゃないかしら！

そんな妄想を勝手に駆り立てていたり。

でも、緒場家さんのお友だちなら、たとえお化けさんでもきっと良いお化けさんのような気がします。わたしにも紹介してくれないかしら。お化けの友だちがいるなんて素敵だわ。

なんて、乙女チックな妄想が止まらないのです。

どこが乙女チックとか思った貴方。まだまだ乙女心がわかっていませんね。

休講

大学に入って驚いたのは、突然、何の前触れもなく、授業が休講になったりすることがある、ということです。

掲示板に張り出された休講通知を見て、まあ！　と一瞬喜んでから、あらあら喜ぶことじゃなくってよ一子さん、と自分に言い聞かせます。

月曜日の一限目が休講になった時は、かなりショックを受けますね。せっかく、早起き、したのに！　とやりきれないこの怒りをどこに発散したら良いのでしょうか。

みっちゃんやしずかちゃんが一緒の時は、ちょっと食堂などに行っておしゃべりをしていれば、九十分なんてあっという間です。一人の時は大抵図書館に足を運びます。ぶらぶらと書棚をめぐってぱらぱらと雑誌を眺めたりしていれば、九十分なんてあっという間です。

まあね、大したことないってことです。

予定が急になくなって、ぽっかり空いた時間ってちょっと得した感じがします。実際は授業料分損をしているわけですが、儲けた、とつい思ってしまうのは、いくら真面目な学生のわたくしと言えど、仕方のないことですよね、うん。

いつものように図書館に行こうかな、と思いました。

まだ一年生のわたくしは、研究室も割り振られていないので、居場所といえば、図書館か学食が関の山です。あーあ、早く上級生になりたいなと。

図書館へ入ろうとしていたところで、ぐう、とお腹がなりました。

ああそうです。今日は寝坊をしたので、朝ごはんを食べ損ねていたのです。

腹が減っては何とやら。図書館へ入りかけていた足を返して、食堂へと向かいました。

食堂の二階にはパン屋さんがいます。わたしは階段を上がってそちらへ行きました。お昼時とうって変わって、この時間にはほとんど学生の姿が見えません。朝の掃除を終えたらしいおばちゃんたちが、三人、小さなテーブルを囲んで楽しそうにおしゃべりしていました。

メロンパンとパックの林檎ジュースを買って、さてどこに座ろうかな、ときよろきよろしていると、窓際に、見知った後ろ姿を見つけました。

「あれ？　しずかちゃん？」

「よう、はよっす」

豪勢にカツサンドなどを食していたしずかちゃんかもごもごと口を動かしながら、振り返りました。食べながらしゃべるのは、たいへんお行儀が悪いと思うんですよ。

「しずかちゃんとも休講だったの？」

わたしはしずかちゃんの隣の席に着きながら問いました。しずかちゃんとわたしは、この時間、別の授業を選択しています。

「んや。朝飯食って来れなくってさあ」

ペットボトルの水をごくごくと飲んで言いました。

「つまりサボリ」

わたしが的確に要約します。

大学に入ってびっくりしたことの二つ目は、こうして簡単に授業をサボる人たちがいることです。

「腹が減っては何とやら。二限は出たい授業だしさー」

「まあまあ、不良な学生さんね」

「だって、思ったよりつまなくてさー、言語学。そっちは民俗学だっけ。おもしろい？」

前髪をさっと払ってしずかちゃんが言います。

「おもしろいよ。先生が変な人で」

「へえ。じゃあ今度からそっちにこっそり聴講しにいこうかなあ」

取捨選択の自由と言って良いのか微妙なところですね。

折りたたみ傘

折りたたみ傘を折りたたむのが苦手なのです。

きれいにぱぱっと折りたためる人ってほんと、尊敬する。

折りたたみつてば、ちっちゃいから鞆は濡れちゃうし、ちょっとの風ですぐにひっくり返っちゃうし。

そして、開いたものは、閉じてたたまねばならないのが世の定め。

数回、開いて閉じてを繰り返して、水を払い、骨を折って、ぐるぐるっとまとめました。

「ちょっと、ちょっと、ワン子。お前それは女子失格」

ちょうど同じ授業だったしずかちゃんに見咎められました。ちっ。あらあら舌打ちなんていけませんわ。

「男女差別はいくないよ」

「世の中には紳士淑女のたしなみというものがある。貸してみ」

しずかちゃんに折りたたみ傘を手渡すと、しゅるしゅるとほどいて、丁寧にたたみ始めました。

なんと、こんなところに折りたたみマスターがいたとは・・・！

「なんで、なんでそんなに綺麗にたためるのっ？」

わたしは動揺を隠せません。

「いや、そんな驚かれてもな。ワン子が大雑把すぎるだけだろうが」

ほい、と返された折りたたみ傘をわたしはじっと見つめました。

「やっぱり、わたしが大雑把なのかしら」

綺麗に折りたためる人が特別能力を保持しているわけではなく。

「己の不足を認めたまえ」

気のせいか、しずかちゃんの鼻が2ミリほど高くなったような気がします。

「それはありがたいお言葉」

指を伸ばして、えいと3ミリほど潰してあげると、

「にやにをする」

と、鼻声でしずかちゃんが言いました。

スマイル

「いらっしゃいませ、こんばんは」

とレジに置かれたかごを引く。

ピ、ピ、ピ、とバーコードを読んでいく。

バーコードの貼ってない野菜や個別の惣菜は、対応しているボタンを押す。

「コロッケが、3点ですね？」

確認をして、

「あ、それメンチなんです」

「す、すみません。失礼しました！」

そんなこともしょっちゅうなのである。

卵には要注意。一度、かごにぶつけて割ってしまったことがあるのだ。あの時は、顔から火が出るかと思った。

パンなどやわらかいものはつぶさないように、後から上の方に乗せる。

出来立てのお惣菜で、温かいものは別にする。

洗剤とか、食品と一緒にじゃ嫌なものも、先に袋に入れてあげる。

そのまま持って帰られるような、お米やティッシュにはシールを貼る。

すべての商品の読み取りが終わったら、合計を出して、

「合計で、二千四百三十円でございます」

正しく数字を読み上げる。

「三千円、頂戴いたします」

お金を受け取ったらレジの自動受け口に入れる。すると、自動でお釣りがじゃらじゃらと出てくるのだ。これには初め、びっくりしたものだ。なんとまあ、賢いものです。文明の、文明の、きりっ？

「五百七十円のお返しです」

お釣りとレシートを渡して、

「ありがとうございました。またお越しくださいませ」

にこりとお見送り。

一見、簡単のように見え、これらの動作を流れるように行うには、なかなか時間がかかりました。やっぱりお仕事と

いうものは大変なものです。

そんな中、何人かのお客さまと顔見知りになりました。

いつも夫婦で仲良く買い物されている方（奥さんがとっても美人！）

背の高い大学生らしきお兄さん（同じ大学かなあ）

可愛いクマのお財布をご使用のおばあさま（素敵！）

双子の女の子を連れのお母さん（お菓자에シールを貼ってくださいって頼まれるの！）

スポーツキャップをかぶったおじいさんと仲良くおしゃべりしながら買い物をされるおばあさんもいます。

「ありがとうございました！」

「ありがとう。この笑顔が良いんだよねえ」

おじいさんが言うと、

「本当にねえ」

おばあさんがにこにこ顔します。

「わ、あ、ありがとうございます！」

舞い上がりそうなほど、嬉しい気持ちになりました。

舞ちゃんと梓ちゃん

バイト先には、高校生の女の子もいます。

新城舞ちゃんと倉野梓ちゃんです。

高校生は彼女たち二人だけなので、とても仲良しです。入る時間帯が重なることも多いのでしょう。

更衣室でよくお花を咲かせてお話をしています。

「これー、これ食べたこのチョコ。すごいんだよ、とろけるの」

「とろけるのっ？ えーなにになに。どこで買ったの、コンビニ？」

「そう駅前のー。食べて食べて。ほんとすごいんだから」

「わーい、ありがと。いただきますっ」

「とろけた、とろけた？」

「とろけた！」

「ね？」

「うん！」

可愛らしいわ、と頬を緩めると、舞ちゃんがぐるりと振り向きました。

「宝野さんもうどうですか？」

「えっ、わたしもいいの？」

思わずトーンが高くなってしまおうたくし。

「どうぞどうぞ」

「とろけますよ〜」

「じゃあ、遠慮なく」

ぱくり。

「とろけました？」

「とろけた！」

きゃいきゃいと一緒にはしゃいでいると、

「ふふふ」

と大嶋さんに大人笑いをされました。

街猫研究会、というサークルにわたしは参加しています。

みっちゃんも一緒です。

リーダは三年生の鴻池菜穂先輩。通称なっちゃん先輩。サブリーダは同じく三年生の西晴彦先輩。通称にしー先輩です。メンバはわたしとみっちゃんの他に、玉岡裕先輩、通称タマ先輩がいます。タマ先輩は二年生です。

「おっすー。みんな集まったな」

なっちゃん先輩は男前です。

サークルの活動日は特に決まっていません。集まりたい時に集まりたい人がメールを回して、集まれる人だけが集まります。

「今日は全員集まったねえ。優秀、優秀」

おっとりとしー先輩が頷きます。

場所はファーストフードのお店です。小さなサークルなので、部室をもらえないのです。集合場所は学食か、外の時はファーストフード店が多くなります。

「例のシロが亀公園に出没したというのは確かなんですか？ 違う奴ではなくて？」

タマ先輩が眼鏡をくいっと持ち上げます。

わたしたち街猫研究会の活動は、街中に出没する猫たちの行動範囲を調査したり、可愛い写真を撮ったりすることです。「猫ストーカーか」としずかちゃんには鼻で笑われましたが、否定はできないかもしれません。しかし、愛は一方通行が常というもの。

「写真を撮るとき、猫にしかめ面されるとぞくぞくするよねー」

というにしー先輩の域にはまだ達してはいませんが。

「あたしがシロを見間違えるはずない！ って言いたいとこなんだけどな。まあ、自信に欠けるから、今日こうしてみんなに集まってもらったわけだ」

腰に手を当てて、なっちゃん先輩が言いました。

シロというのは、わたしたちが名づけた名前で、白猫のシロです。首輪をしていないので、飼い猫か否か定かではないのですが、毛並みが綺麗だから、飼い猫なのでは、とタマ先輩は予測しています。

シロはひととき警戒心の強い猫で、彼女（ぜったいメスですよ、というタマ先輩の言）と仲良くなることが、わたしたちの目下の関心ごとでありました。

「ここで議論していても始まらないし、とにかく亀公園へ行ってみようじゃないか」

にしー先輩が提案します。

わたしたちはそれもそうだと頷きました。まだ三分の一ほど残っていたオレンジジュースをわたしはストローで一気に飲み干しました。

なっちゃん先輩とにしー先輩はお付き合いしています。

と、言いたいところですが、タマ先輩にリサーチしたところ、

「違う違う。あの人たちは腐れ縁なんだって。幼稚園の頃からの付き合いって言うから、相当だよ」

という返答をいただきました。

「お似合いなのに」

「ほんとうね」

わたしとみっちゃんは顔を見合わせます。

「そんなこと言ったら、鴻池先輩に大笑いされて、西先輩に延々と辛い思い出話を聞かされるはめになるよ」

その思い出話、是非聞いてみたいと言っては不謹慎でしょうか。

「タマ先輩は、その、彼女さんとかいないんですか？」

「残念ながらね」

タマ先輩は肩をすくめます。

「そういう君達は」

「残念ながら」

わたしとみっちゃんもちょこんと肩をすくめました。

「タマ先輩は、どんな彼女が理想なんですか？」

訊いてみます。

「え？ うーん、そうだなあ」

タマ先輩は眼鏡の奥の目を細めました。

「自分と正反対の人だと面白そうだよな。活発で、おしゃべりで、ちょっと不真面目な子とか」

「ほほう」

なるほど。

「みっちゃんは？」

訊いてみます。

「そうねえ。ネクタイの似合わない人かしら」

片手を頬に当て、みっちゃんは上品に首を傾けます。

「なーるほど」

何となく、印象は分かる気がします。

「そういうittyちゃんは？」

わたしはもうずっと決まっています。

「沈黙が心地よい人！」

好きな人とは、同じ空間と時間を共有できるだけで幸せになれるですね。

飲み会

「何でもない日、おめでとうー。乾杯！」

「乾杯！」

今夜は街猫研究会の飲み会です。

なっちゃん先輩の音頭で、わたしたちは缶を打ち合わせました。未成年のわたしとみっちゃんはジュースです。

場所は大学の広場。丸い白いテーブルに、缶ビールや缶ジュース、スナック菓子やおつまみがてんこ盛りです。懷に優しい、屋外の宴会なのでした。

「しかしさー、この間のは、やっぱりシロなんじゃないの？」

ごくごく缶ビールを飲んで、なっちゃん先輩が切り出しました。先日、みなで亀公園に行ったとき、なっちゃん先輩が言っていた白猫を見かけたのですが、すぐに逃げられてしまったので、それがわたしたちの知っているシロなのかどうか、分からなかったのです。

「俺は意義ありますね。シロはもっとスマートな尻尾だったと思います」

タマ先輩がバリッとえびせんの袋を開けて言いました。

先日からの議論が続いていて、決着がつかないのです。

「まあ、また亀公園で見かけた時にしっかり確認すればいいじゃないか。写真が撮れるといいんだがなあ」

缶チューハイに口をつけながら、おっとりとしー先輩が言いました。

「それもそうだな」

なっちゃん先輩が頷くと、タマ先輩も頷きました。

わたしもあれから、近くに來た時は亀公園をチェックしているのですが、なかなかその白猫を目撃できません。彼女（もしくは彼）の正体が判明するには、まだ時間がかかるかもしれません。

「大きな満月」

マイペースのみっちゃんは、夜空を見上げてうっとりと呟きました。

つられて皆も夜の空を仰ぎます。

みっちゃんの言う通り、大きな真ん丸い月が、ぽっかりと夜に浮いていました。黄色い、明るいお月さまです。あそこに行った人がいるんだなあと思うと、いつもとても不思議な気持ちになります。わたしも、いつか行けるでしょうかな。

「見て！ 月を閉じ込めた！」

なっちゃん先輩が指で丸を作ってはしゃいでいます。

「じゃあ俺は月にデコピンしよう」

にっしー先輩が夜空に指を弾きます。

「駄目だ、この酔っ払いたち」

タマ先輩がため息をついて、わたしとみっちゃんは顔を見合わせて笑いました。

ぐうたら日和

今日は前から分かっていた休講日で、バイトもなく、サークル活動も、友達との約束もない、何にもない1日です。

「うふふ、何をしようかな」

とりあえず、洗濯とお掃除という休日のお仕事を終えて、紅茶を淹れたところです。こてん、と床に寝転びます。窓の向こうに、青空が見えました。電車の通る音がして、微かに震動が伝わってきます。

ああ、今日も仕事や学校の人がたくさんいるんだなあ。

そう、思いました。

ふあ、と欠伸が一つ。

お出かけしても良いけれど、このままお家でごろごろしているのも素敵です。

うーん、と手を伸ばして図書館で借りた本を引き寄せました。ぱらぱらとページをめくり、読み途中だった箇所から文字を目で追います。

うと、とまぶたが落ちました。

このまま二度寝しちゃうのも一つの魅力的な案です。どうしようかなー。でも、せっかくの休日、そんな、寝てすごして終わるのももったいないなあ。もったいないと言えば、卵の賞味期限が昨日までだった。二つも残っているし、使っちゃわなくちゃ。晩御飯はオムライスだね。イエーイ……

「はっ」

と飛び起きると、青かった空はオレンジがかっています。

「え、えっ、タイムスリップ？」

頭が大混乱です。

時計を見ると、四時を指していました。

「マジですか」

問いかけても、時計氏はただ淡々と時を刻むばかりです。

はあ、とため息をついてから、うーんと伸びをするとお腹がぐう、と鳴りました。

顔を洗って、それから夕飯の買い物にでも行きましょう。

今日は何にしようかな。……そうだった、オムライス！

前髪

前髪が伸びてきたので、切ることにしました。

自分で、です。

美容院に行ったらいいんですけどねー。前髪くらいならば、自分で切ります。自足自給です。ん？ 違う？

洗面台に、広告を広げます。新聞をとっていないので、郵便受けに入れられるチラシが、こういう時に、貴重な資源ですね。

後ろ髪を耳の後ろに追いやって、ピンでかちっと止めます。

櫛で前髪を揃え、はさみに持ち替えます。

左手の人差し指と中指で前髪を挟んで、ぴんと張ります。さあて、どのくらい切ったらよいか。しゃきん、とはさみを一太刀。むむ、もうちょっと、かな？ しゃきん、しゃきん。良い感じ？

大体長さを揃えたら、はさみを縦にちょきちょきと入れます。花子さんの前髪を避けるためです。ぱっぱっと、指先で前髪を何度か梳いて、切った髪を払います。顔についた短い髪も落として、ぐしゃぐしゃっと広告を丸めれば、前髪断髪式の終了です。

以前はよく、前髪が斜めの切り口になって、ぎゃー、と一人涙したのですが、もう慣れたもんですな。うふふ。

自分で出来るっていうのは何でも嬉しいものです。

たとえばご飯とか、アイロンがけとか、洋服のボタンをつけたり、お鍋を洗ったり、電気代を払ったり。

誰かにやってもらったら、それは楽だし、おいしかったり嬉しかったりもするものですが、自分に自分の手が届いている感じが、わたしは安心します。だからどうしても、大学生になったら一人暮らしがしたかったんです。

もちろん、仕送りはしてもらっているわけで、何もかもを一人では出来ていないんですが、おかげで、そういうありがたさにも気づけたと思っています。

生活していくには何が必要で、とか、今旬の野菜は何で、とか、朝は自分で起きないといけないから夜更かしはほどほどにして、とか。

自分で自分の生活のことを考えて、コントロールできるのは、とっても大事で必要なことでしょうか？

そういうことが分かった上で、少し先の未来で素敵な誰かと一緒に暮らせたら、いいな。

頼って頼られることの嬉しさを知って。

あ、痛。前髪が、目に、入ったよう・・・。

良いですか。

ここからお話しすることは、心して聞いてください。

．．．．．。

心の準備はできましたか？

それはもう、言葉にならないほど怖い体験をわたしはしたのです。

引き返すのならば今のうち。

あ、焦らしすぎ。どうもすみません。

こほん。

夏の、少し蒸し暑い夜のことでした。

わたしは街猫研究会の面々とおしゃべりをしていて、帰りが遅くなったのです。

アパートの、廊下の電気は切れていて、真っ暗な中、わたしは慣れた感覚で自分の部屋の前までたどり着きました。靴を手探りでまさぐって、鍵を取り出しました。これまた慣れた感覚で、暗闇の中、鍵を鍵穴に差し込みます。

その時です。

ひたっと、冷たい感触が手の甲に降ってきたのは。

ああ、思い出すのもおぞましい。ぶるぶる。

「えっ、何？」

わたしは思わず声を上げました。

真っ暗なので、すぐにそのものの正体は分かりませんでした。

濡れた感触が手の甲を這います。

かすかな星明りに照らされたその正体を見た瞬間、わたしは声にならない叫び声を上げて、ぶんぶんと手を振りしました。

後から思えば、それをパニック状態というのでしょうか。

がちゃり、と音がして、その時、隣の部屋のドアが開きました。

ぶん、と思い切り振ったわたしの手から、それが飛んでいきました。小さな音がして、今お隣から出てきた方の額に着地します。

お隣の方は、何を隠そう、緒場家さんでした。

「どうされたんですか？」

緒場家さん、意外に敬語です。いや、そんなことを言っているわけではありません。

「あ、あ、あわわ」

わたしは腕に鳥肌を立てて、緒場家さんの額を見ました。

「おや？ ナメクジ？」

緒場家さんも気がついて、額に飛んできたナメクジをひょいと掴みます。そう、わたしの手に降ってきたのはナメクジだったのです。

わたしは、悲鳴を上げたいのを何とか飲み込みました。緒場家さんは、何でも無いというふうに、つまんだナメクジをそのまま外に放ります。なんて、なんて、頼もしいのでしょう。

「すみませんすみませんありがとうございました」

わたしはようやく少し我を取り戻して、何度も何度も頭を下げました。

「はははっ。すごい悲鳴が聞こえたもんだから、何事かと思いましたよ。良かった良かった」

緒場家さん・・・！　なんて優しい方なのでしょう。わたし、緒場家さんの隣人さんで本当に良かったです。

新幹線

夏休みなので、実家に帰ることにしました。

新幹線に乗って帰ります。

新幹線というのはすごい乗り物ですねえ。乗っている間は、どれだけの速さかなんて、ちっとも分からないのですが。すごく速いんですよね。東京から京都まで2時間半くらいでばびゅん、です。ばびゅん！

新幹線のお楽しみは何といっても駅弁ですね。いつも慎ましい食生活をしているので、この時ばかりはちょっぴり贅沢をします。地域限定のものとか良いですよええ。いつも東京京都間の往復しかしないので、もっと色んなところへ新幹線で行ってみたいです。いえ、決して駅弁が目的というわけではなく。

ペットボトルのお茶も買って、お昼の準備は万端です。

お腹も空いていることですし、すぐさま開けて食べたいところですが、ここでぐっと我慢するのが肝要です。肝心要。

後ろの席のお母さんが騒ぎます。

「ほらほら、見てごらん。富士山よ」

それを合図に、わたしも読んでいた本から顔を上げます。

富士山！

わたしの目は少女漫画の女の子のように輝いていると言っても過言ではないでしょう。自分では見えませんが。

富士山は、とても美しい形です。思い入れも誇らしさも愛着も、特に持ち合わせていないのですが、その姿を見ると、嬉しいため息が出ます。

今日は運良くとても良い天気で、青空の下、その美しいシルエットが堂々と映えています。少し眩しいのですが、日除けを下ろさずに、その姿を堪能します。

窓際の席をゲットできれば幸い。

わたしは最高の眺めにご満悦になりながら、さてさてと、お弁当の蓋を開きます。

ちょっとしたピクニック気分を味わいながら、いただきます。

お久しぶりのお友だち

帰省して嬉しいことは、母上のご飯が食べられること。テレビと一緒に見られること。ユニットじゃないお風呂に入ることなど、色々ありますが、高校の時の友だちに会えるのが、やっぱりスペシャルです。

帰省する日を連絡していましたから、都合を合わせ、懐かしい駅で懐かしい友と待ち合わせをしました。

離れてからまだ一年も経っていないというのに、もう十年も経ったかのような懐かしさです。電車の、いつも乗っていた車両の、好きだった右側の座席に座り、変わらない車窓からの景色を眺めます。これから先、どこへ住んでも暮らしても、ここがわたしの故郷なんだなあとちょっとしんみりした気持ちになったり。

「や、帰ってきたねー」

「こらこら、ちょっと痩せたんじゃないか？　ちゃんと食べてるの？」

「えへへ。久しぶり！」

駅に着くと、わが友二人はもう待っていました。二人ともこの近所なので自転車です。

たったの数ヶ月ぶりなのですが、変わらない友人にちょっと安心して、たったの数ヶ月ぶりなのですが、顔を合わせて言葉を交わすのが何だか面映い。

高校生だった頃は、毎日のように顔を合わせていたからかな。新しい友だちも大好きですが、高校の友だちも大好きです。

「これで鈴ちゃんもいればねえ」

「うんうん、北海道だもんねえ」

わたしたちは高校の頃は仲良し四人組で、もう一人、鈴ちゃんという子と仲良しだったのですが、彼女は北海道の大学に行ってしまったので、今この場には集まらなかったのです。

「夏は帰省しないの？」

「うん。お正月には帰ってくるって言ってたよ」

「そっかあ」

一抹の寂しさがあります。今はまだ大学生で、こうして長いお休みごとに地元に戻ってきたりしますが、社会人になって働くようになったら、今よりもっと道が分かれて離れてしまいます。少しずつ、そうして会わなくなっていくかもしれないかもしれません。あんなに毎日、おしゃべりをして、騒いでいたのになあ。

「いちがしょんぼりし始めちゃったよ」

「お腹が空いたんでしょう？　とりあえずお昼にしようよ」

「賛成！」

今落ちこんでいても仕方ありません。何はともあれ、今日はいっぱいおしゃべりしましょう。話したいこと、聞きた

いことがもう、盛りだくさんなのですから。

何となく、近くに来た時は亀公園に寄っていくのがわたしの習慣になっていました。

そう、例のシロと思われる猫を確認するためです。

猫にはそれぞれ、自分のお気に入りの場所というのがあり、一度見かけた場所では、しばしば見かけることが出来るものなのですが、今回のシロ（仮）はなかなかわたしたちの目の前に現れてくれませんでした。

なっちゃん先輩も、時間帯を変えたりして、何回か覗きに來ているようなのですが、

「今日もフラれた」

と、器用に鼻の頭に皺を寄せていらっしゃるばかりなのです。

なのでわたしがふらりと亀公園に訪れたときも、シロ（仮）に会えるとは微塵も期待していなかったのです。

しかし、物事は得てしてそういう時に奇跡を見せるもの。

「あ」

思わずお間抜けに口を半開きに開いてしまったわたしの目の前に、白猫が一匹。

公園に、半分埋まったタイヤが並んでいるところがあるのですが、その、手前から三つめのタイヤの下に、彼（彼女？）はいました。

わたしとの距離は、五メートル、といったところでしょうか。顔を確認するには少し遠い距離です。しかも、タイヤの影でよく見えません。背格好は、確かにシロと同じくらいに見えますが、どうでしょう。

白猫も、とうにわたしに気がついていて、じいっとこちらを見えています。警戒しているのです。わたしも、じいっと白猫さんを見つめたまま、自分がスローモーションの動画になったように、ゆっくりと膝を曲げてゆきました。

お互いの視線の間に、何ともいえない緊張が漂います。そろそろそろりと、膝を曲げ終わり、しゃがむ体勢になったところで、何てことでしょう！ わたしの肩から鞆がずるっと下がってしまったのです。どすんと（誇張ですよ！）地面に鞆が着いた途端に、白猫はさっとタイヤの下から抜け出して逃げていってしまいました。

だがしかし、わたしはしっかりと見ました。彼（あるいは彼女）の耳の先端に、小さな黒ぶちがあるのを！

シロは真っ白な白猫です。ゆえに、あの白猫はシロではなかったのです。

「なんとまあ！」

わたしは興奮のあまり、文学的な声を洩らしてしまいました。

「なんとまあ・・・」

ちょっと気に入ったので、もう一度呟いてみます。くすくすと笑いが洩れました。

これはみなさんに早速メールをしなくては。

あの猫はミミと名づけましょう。

新しい猫を見つけたら、愛称を名づける権利があるのです。

街猫研究会のメンバで集まりました。今日は、たまちゃん先輩は欠席です。

夕方の学食に集まったのはわたしとみっちゃん、それからにしー先輩です。

「あー、遅れちゃった。すまんすまん」

遅れてやって来たのはなっちゃん先輩。

「わ、なっちゃん先輩格好いい」

わたしは思わず手の平を合わせました。

「ん？ そう？」

なっちゃん先輩は頭と腰に手を当てて、モデルのポーズをしてくれます。なっちゃん先輩は黒色のスーツを着ていたのです。ぐん、と大人っぽく見えます。

「就活？」

「まーね。嫌んなっちゃうよもうー」

なっちゃん先輩は椅子に座ると、ぐでーと腕を伸ばして体を伏せました。お疲れみたいです。

「大変そうですね」

みっちゃんが言いました。

「他人事じゃあないよう？ 君らも二年後には同じ運命さ」

体を起こすと、頬杖をついて、なっちゃん先輩はにやりと笑いました。

わたしとみっちゃんは顔を見合わせます。ようやく大学生も板についてきたばかりというのに、もう就職の話なんて、まったく実感が湧きません。

「俺みたいに、大学に居残るっていう手もあるけどね」

やさしくにしー先輩は笑いました。にしー先輩は大学院に進むつもりみたいです。

「でもさ、わたしもちょっと割り切れなくてさー。就職しないと自分が困るのは目に見えてるんだけど、大学卒業したら、はい次は就職ねっていう、何ていうの？ このエスカレータ式な感じがちょっと気持ち悪くて」

なっちゃん先輩は息を吐いて、唇を曲げました。

「贅沢なことってんのは分かってるんだけど、大人になったらもっと、自分のペースで好きに自分のことを決められるような気がしてたよ。いや、ほんととはそう出来るんだよね。ただ、そうすることで、みんなの流れから置いてかれるのがちょっと怖いのかもな」

「やりたいことがあるか、ないかじゃないの？ とりあえず就職を先延ばしにするために院に行く奴もいるし。とりあ

えず就職して、休暇を趣味に費やす奴もいるだろうし。どうしてもやりたい仕事があるから、その仕事に就けるように就活とか勉強とか、頑張る奴だっているだろう。自分にとって、一番大事なものは何かってこと」

にっしー先輩、さすがです。

「それが簡単に分かってれば、苦労しないって」

なっちゃん先輩は肩をすくめました。

そうですね。自分にとって一番大事なものが、すぐに見つかる人もいれば、一生探してる人もいるかもしれません。わたしにとって、それは何でしょう。大学を卒業して、わたしは何処に進むんでしょう。

まだ、分かりません。

長い夏休みももうすぐ終わりです。窓の向こうの空は、数日前より高さを増したみたいです。わたしは目を細めて、少しだけ未来を見つめました。